

「デカセギ」来日30年 浜松でシンポ

永住望むブラジル人増

1990年の入管難民法改正後にブラジルから来日した出稼ぎ労働者をテーマにしたシンポジウム「『デカセギ』の30年、過去から未来へ」(静岡文化芸術大文化・芸術研究センター、在浜松ブラジル総領事館主催)が26日、浜松市中区の同大で開かれた。日系ブラジル人や研究者ら4人が登壇し、多文化共生に向けた今後の在り方を探った。



多文化共生に向けて意見を交わしたシンポジウム
26日午後、浜松市中区の静岡文化芸術大

就労形態、高齢化課題

池上重弘副学長は、持ち家比率が増加する在日ブラジル人の居住形態の変化を示しながら「永住希望者は確実に増えている」と説明。一方で就労形態は「派遣や請負が多く、全体としてまだ不安定な状況」と指摘した。高齢化が進む第1世代の対応や、日本語とポルトガル語の両言語とも十分に話せない第2世代が現れている点なども課題に挙げた。

ダさんは、日本社会に溶け込むために日本語を習得する必要性を強調した。
同大では11月4日、日午後2時から、日
皆さんは、日本社会に溶け込むために日本語を習得する必要性を強調した。
同大では11月4日、日午後2時から、日
まで、ブラジル人コミュニティを写した写真展が開催中。10月27日、本とブラジルの交流をテーマにしたピアノコンサートも開かれる。
(浜松総領事館・佐野由香利)

30年前に来日した日系ブラジル人3世の写真展が10月27日、同大で開かれた。